

第3回 岡崎地域活性化ビジョン検討委員会 摘 録

日 時：平成22年12月13日（月）午後1時30分から午後4時00分

会 場：平安神宮 記念殿ホール

出席委員（敬称略）

委員長

もんない てるゆき
門内 輝行 京都大学大学院工学研究科教授

副委員長

たかぎ ひさかず
高木 壽一 岡崎地域活性化懇談会座長

委員（五十音順）

うえむら のりこ
上村 憲子 市民公募委員

おおた せつこ
太田 節子 神宮道商店街組合会長

こばやし かおり
小林 香 ショウクリエイター、「第26回国民文化祭・京都2011」開閉会式 脚本・演出担当

さわべ よしのぶ
澤邊 吉信 岡崎自治連合会会長

なかじま せつこ
中嶋 節子 京都大学大学院人間・環境学研究科准教授

なかにし かずや
中西 一彌 市民公募委員

にしむら たかし
西村 隆 京都市総合企画局長

はまさき か な こ
濱崎 加奈子 伝統文化プロデュース連REN代表

ふじい ようこ
藤井 容子 京都市未来まちづくり100人委員会（岡崎ホールディングス）、ライター

ほんだ かずお
本多 和夫 平安神宮禰宜

みなみ たかあき
南 隆明 京都商工会議所観光産業特別委員会委員長、京都駅ビル開発（株）相談役

むらい やすひこ
村井 康彦 京都市美術館長

もりもと ゆきひろ
森本 幸裕 京都大学大学院地球環境学堂教授

やまぐち えいいち
山口 栄一 同志社大学大学院総合政策科学研究科教授

以上16名

1 開会

事務局（総合企画局市民協働政策推進室プロジェクト推進第二課長 三科）

ただ今より第3回岡崎地域活性化ビジョン検討委員会を開催させていただく。委員の皆さまにおかれては御多忙の中、御出席いただき御礼申し上げます。本日の委員会は公開となっており、報道席及び一般傍聴席を設けているので御了承願いたい。

本日の議題は、「来訪者アンケートの結果」、「作業部会の取組状況」、「ビジョン（案）中間まとめとパブリックコメント」の3つである。

なお、参考として配布した岡崎地域の総合的なホームページ「京都 岡崎ポータルサイト（<http://www.city.kyoto.jp/sogo/project/okazaki/>）」を地域の関係施設との連携の下で、12月15日から開設する。是非、御覧いただきたい。

それでは、ここからは門内委員長に進行をお願いしたい。

○門内委員長

ここから私が進行をさせていただく。では早速、各議題について説明をお願いします。

2 議題

(1) 来訪者アンケートの結果について

——（説明 事務局 総合企画局市民協働政策推進室岡崎地域活性化担当部長 奥）——

(2) 作業部会の取組状況について

——（説明 作業部会長 高木副委員長）——

(3) 「ビジョン（案）中間まとめ」とパブリックコメントについて

——（説明 事務局 総合企画局市民協働政策推進室岡崎地域活性化担当部長 奥）——

3 意見交換

○門内委員長

ただいま説明のあった「ビジョン（案）中間まとめ」について、意見交換を行いたい。特に作業部会に参加されていなかった方々には、是非、積極的な御意見をいただきたい。

○澤邊委員

岡崎地域に暮らして70年になるが、私を含め、地域の皆が岡崎地域に住んで良かったと思っている。50年、100年後の将来像と言われても、我々には想像しにくいですが、引き続き、住んでいる者も誇りを持てる地域であり続けたい。

現在、わずか半径1キロ程度の範囲に素晴らしい施設、文化財、地域資源が集積している。およそ100年前に、琵琶湖疏水、平安神宮や大鳥居の建設など、かなりの勇気を持って新たな環境整備に挑んでいただいたことが、今の私たちの誇りとなっている。

来訪者アンケートの中には「現状でよい」という意見もあり、こうした点を踏まえると、今、やろうとしていることが将来的に、どれぐらい結果になるのか、価値あることにつながるのか想像が難しい。

多くの方々に岡崎地域を訪れていただき、楽しんでいただくということは、全く問題はないが、我々のように生活している地域住民の視点も是非考慮に入れていただきたい。秋の観光シーズンの岡崎地域周辺が、どのような現状にあるか、皆さんにも知っていただきたい。

○太田委員

50年、100年後の将来像については、やはり想像がつきにくいですが、夜の賑わい創出は、是非取り組んでいただきたい。また、来訪者を案内するための「岡崎コンシェルジュ」や、情報発信のためのホームページの更新など、関連する様々な取組について、関係者の意見を盛り込みながら、どのような形で進めていくかということが鍵になると思う。

岡崎グラウンドの将来的な在り方については、岡崎地域は美術関係の施設・資源が多いので、現代アートを並べられるような空間もあってほしい。また、地域の広域避難場所でもあるので、あまり建物を建てずに、できれば広い空間として残してほしい。

○門内委員長

様々な取組の推進体制については、作業部会でも議論になった。中間まとめ（案）の最後に掲載しているが、実現のためのプロセス、すなわちエリアマネジメント組織の在り方が非

常に重要になる。多くの方に主体的に参加いただき、まちを育てながら、将来ビジョンも進化させていくというような形になろうかと考えている。

○山口委員

私は以前、海外で研究をしており、ロンドンやニースにも住んだことがある。ニース、パリ、モナコ、カンヌなど、いわゆる世界的に「創造都市」と呼ばれている都市を思い浮かべていただきたい。私の実生活体験上においても、これら創造都市群と比べ、京都は全く引けを取っていない、むしろ、世界的な創造都市の中でも、ベスト3に入る都市である。中でも、この岡崎地域は、いわば京都の宝のような場所であろう。

世界的な創造都市にも引けを取らない岡崎地域であるが、比較して、明らかに足りない要素がある。何かというと、「食」の要素である。

例えば、あえて極端な質問をすると、現在の京都会館のカフェテリアで若い人たちがデートをしたいと思うか。あるいは中高年層の方が、コンサートやオペラを見に来た晴れやかな気分、あのカフェテリアに入りたいと思うか。

世界的な創造都市には、「食」という要素を必ず埋め込んでいる。ドレスコードの高い飲食施設、あるいは気軽だけれどもお洒落なレストランなど、「食」という要素をしっかりと埋め込んで、賑わい空間の核にしている。

先ほど「世界中から人を引きつける」という言葉があったが、人を引きつけるためのかなり重要な資産（アセット）が「食」である。この岡崎地域には、恐らくこうしたお洒落なレストランや、晴れ着で行けるようドレスコードの高い飲食施設が足りないのだろう。来訪者アンケートで滞在時間が短いのも、そうした表れではないか。

ビジョン案自体は大変良くまとまっているが、カフェやレストランが賑わいを創出するための一つの例、程度で表現されている。「食」は賑わい創出の核であり、もう少し重要な要素として記述した方が良い。また、その際に重要になるのが、地域全体としての「食」のランドデザインである。京都会館のようなオペラ、コンサートを開催する施設にはドレスコードの高いレストランを、美術館や図書館などはお洒落で気軽なカフェテリアを。地域全体として必要な「食」の機能が上手にデザインされていることが重要である。

○森本委員

ビジョンについては、良くまとまっており、必要なテーマがそれなりに頭出しできているように思うが、やはり環境に関する視点を積極的に取り入れることをもう一度提案したい。

現在、世界的に環境問題への対応が大きな潮流となり、また京都市としても環境モデル都市を推進している中で、環境への意識、つながりをもう少し明確に出した方が良い。

例えば、最近、世界的には「ロー・インパクト・ディベロップメント」という考え方が浸透してきている。あらゆる開発・整備を行う際に、環境や生態系に配慮した内容にするという考え方である。岡崎地域の活性化においても、個別・具体的な取組として水環境や生物多様性について取り組む、というスタンスではなく、例えば、先ほど話題になった賑わい創出のためのレストラン整備など、あらゆる取組・事業において、環境や生態系に配慮した概念をベースに持っているというスタンスは打ち出すことが極めて大切だと考える。

今年、生物多様性条約を議論するCOP10という会議があったが、こうした世界的な流れの中で、京都としてのスタンスを岡崎地域のビジョンでも表せれば良い。

ロー・インパクト・ディベロップメントという考え方では、岡崎地域にとって良い取組だけではなく、岡崎地域の資源・環境が実は別の地域の恵みで支えられているという視点や、岡崎地域での取組が他の地域に良くない影響を与えているのではないかとという視点が出てく

る。こうした視点を持つことで、例えば、雨水処理のデザイン一つにおいても大きく変わってくる。

また、岡崎地域のアイデンティティが何かという点においては、実は、街路樹など視覚的要素が与える影響、すなわち風景・景観の役割はかなり大きい。地域アイデンティティとして全体の風景の創り方、また、地域全体としてロー・インパクト・ディベロップメントを目指すこと、その2点を方針として出すことが大事である。

○門内委員長

確かに環境というのは重要なテーマである。個別方策テーマの一要素として記載した形ではなく、岡崎活性化の全体の取組においても浸透しているという表現を盛り込みたい。

○上村委員

専門的なことは分からないが、岡崎の「売り」を何にしたいかを明確にすることが必要である。

例えば、最近の成功事例として有名な瀬戸内国際芸術祭がある。私も実際に7つの島を訪れた。ひとくくりに成功したと言っても、実際に訪れてみると、それぞれの島で受ける印象は異なっていた。やはり地元の人が、芸術を愛し、皆にアピールしたいと動いている島は、すごく良い印象を受けた。直島のように、芸術作品を活かし、今後も島外からずっと来訪者を呼び込みたい、アートで売っていききたいと村民が動いているところが成功していた。

振り返って、岡崎地域はどうであろうか。来訪者は、岡崎地域の魅力を十分堪能したい気持ちで来ているが、先ほど指摘あったように「食」の機能は十分でない。数少ない細見美術館の地下にある素敵なレストランもいつも行列している。また、道路渋滞や混雑しているバスの問題などもある。来訪者の方に満足して帰っていただけるために、岡崎をどのようにしたいか、「売り」を何にするかを明確にする必要がある。

また、岡崎グラウンドについても、将来的にどのような空間にしたいのかが、具体的に伝わる方がよい。

○門内委員長

トータルとしての売りを何にするのかということ、また、特に瀬戸内国際芸術祭の例で顕著であったが、一つ一つはあまり大きな出来事ではなくても、それをうまく組み合わせ、全体として大きな出来事に仕立て上げることが必要という御指摘をいただいた。

作業部会でも橋爪委員から、施設間連携を進め、岡崎を訪問する時間全体を上手にデザインすることが必要という類似した指摘があった。

○小林委員

舞台に関わる仕事をしているので、京都会館や文化・芸術を中心に発言させていただく。

来訪者アンケートでの「岡崎地域を一層魅力ある地域にするためにどのような取組が必要か」という質問結果では、「質の高い芸術を楽しむことができる文化施設・催しの誘致・開催」が46.1%で最も多い。こうしたアンケート結果に対して、また「背景と目的」（1ページ）の中で「世界に冠たる文化・交流ゾーンとしての機能強化」と掲げていることに対して、ビジョン案の全体の中で、文化・芸術の位置付けや方策の記述が不十分ではないか。舞台芸術に関する方策については「京都会館を岡崎地域活性化の核として世界一流のオペラの開催が可能となる舞台機能の強化をはじめ・・・」というところだけである。

また、「将来像」（7ページ）の1つとして「創造する文化・芸術の都」が挙げられてお

り、その具体的表現として「世界水準のオペラ、京都が誇る伝統芸能に酔う舞台芸術の本場」とある。オペラと伝統芸能しか記載されておらず、何となくオペラと聞くと文化的なイメージがあるので、一瞬、惑わされてしまうが、現代の私たちの暮らしの中の文化・芸術的要素として果たしてオペラというものが、どれだけ密接に関連したものであるか疑問である。文化・芸術に関するこのあたりの記述、考えを、もう少し深めるべきではないか。

先ほど、ドレスコードの高い「食」の機能が必要との意見があったが、「食」のレベルにも見合うような作品を上演すべきだと思う。また、もっと具体的には、その作品が一体何なのか、世界水準のオペラなのか、ということを考えなければいけない。

さらに、将来像の7ページに「世界から芸術を夢見る若者が集まるエリア」とあるが、これも具体的にどうやって、こうした若者を集めるのか。具体的な検討は、恐らく次の段階であるエリアマネジメント組織が担当するのも知れないが、「素晴らしい文化・芸術の催し」をもっと増やしてほしいという来訪者アンケートでも最も多かった希望に対し、具体的に検討できる専門家が入っている委員会なのかどうかということ懸念している。

いずれにせよ、一方的に発言するだけの会議ではなく、私の意見に対して他の委員の方の御意見・反応を伺ってみたい。

○濱崎委員

私は作業部会のメンバーであった。検討テーマが非常に多岐に渡ったため、作業部会の中で、京都会館だけに関する議論の時間は十分に取れていない。

また、私も検討委員会の当初には、岡崎地域と言えばやはり文化・芸術だろう提案していたが、他の委員の方から観光・M I C E、環境、歴史など色々と意見があった。作業部会の中でも、様々なテーマが関わる中、地域のポテンシャルや将来像、方策をどのように考えるかを議論し、現在の案のような形となった。岡崎グラウンドの在り方についても、作業部会の中では、自由に使える広場にして様々なパフォーマンスや催しに活用できる空間としたいなど、様々な議論があった。

京都会館についてももう少し補足すると、作業部会の中で、建築的な視点でしか議論できなかった部分は確かに反省点である。現状の建物について、かなり制約があるという前提認識での、議論の枠組みになっていたかもしれない。

○平竹室長

京都会館の再整備に関する記述についてだが、京都会館の機能を最大限に向上させる分かりやすい例として、「世界水準のオペラ」という表現をさせてもらっている。必ずしも、毎日毎日、オペラばかり上演されるわけではない。世界一流のアーティストと同じ舞台に、京都の青少年、市民が立ち、合唱したり、演劇したりすることが非常に大切ではないかと考えている。

京都会館に関しては、50年間使ってきた市民の想い、また建物自体を大事にしたいという方々、また、より素晴らしい舞台・演出をしたいという方々もいる。様々な意見がある中で、どのような再整備を考えるのかというところで、オペラというものを一つの到達点、一番高い目標として、書かせていただいている。

○藤井委員

私も作業部会のメンバーであった。今、小林委員の意見をお聞きして、確かに文化・芸術という点では、具体的に何を提供するかという点については作業部会で十分掘り下げられなかったと感じた。逆に、具体的に盛り込むとすると、どのような形になるかアドバイスをい

ただきたい。

作業部会での議論を振り返り、原案では若干伝わりにくいのではないかなと懸念する部分があるので補足したい。

1つは14ページ、岡崎グラウンドの在り方の検討についてである。岡崎グラウンドの在り方については、作業部会でもかなり議論となった。現在、利用されている方々もいる中で非常にデリケートな問題もあり、原案のように「岡崎地域の核として市民、来訪者がより幅広く活用・交流できる空間とする方向で検討する。・・・」という書き方になっている。先ほど濱崎委員からも説明があったように、岡崎グラウンドについては、より多くの人利用でき、様々なことに対応可能なオープンスペースとして残したい、というのが作業部会の合意であった。また、太田委員の「岡崎グラウンドについては、広域避難場所としての役割も考慮したい」との御指摘にも賛成である。

また、森本委員から御指摘あった「環境」に関する取り扱いが部分的にではなく、全体を通底する包括テーマになっているべきだという点、これも作業部会の中でも話題になったことである。原案では、それが十分伝わる形になっておらず、若干改善の余地があるようだ。

○中嶋委員

ビジョン案は大変よくまとめていただき、素晴らしいものになっている。将来像のキーワードも分かりやすいものになっているが、1点意見を申し上げたい。

岡崎地域は1つのエリアであるが、将来像としては5つ掲げられており、将来像それぞれが独立した内容のように見えてしまう。決してそうではなく、岡崎という場所の中に、これら5つの将来像が互いにつながりあい、重なり合っているというイメージであろう。この重なり合っているという点が大切であり、是非、そうした概念を表す表現を工夫していただきたい。

また、私が専門にしているせいもあるかも知れないが、重なり合いの中で、一番ベースにくるものは、やはり岡崎の土地の記憶、歴史であると思う。歴史の部分があまり専門的になり過ぎないように、薄めて書いているのだと思うが、近代以降だけでなく、古代、中世の岡崎の歴史性も含めたい。

最後にもう1点だけ、対象エリアについてである。対象エリアを表現する上で、どこかで線を引かなければいけないのだろうが、例えば原案のコアゾーンの位置付けも内国勧業博覧会跡地であり、これまでの岡崎のイメージを大きく超えるものではない。例えば、公園区域に拡大する琵琶湖疏水を含めたり、無鄰菴、インクラインも含めたりするなど、従来より一歩踏み出した、新しいビジョンとしての打ち出し方ができないものか。

○門内委員長

将来像に関する御指摘は、まさにそのとおりである。5つの将来像は独立しているのではなく、相互に関係し、重なりあっている。

また、近代化以前の歴史性の取り扱いについては、作業部会でも議論になった。京都の他の地域と比較し岡崎の特性を強調するならば、特に近代化以降を取り上げるべきだろうとのことで原案のようになった。

また、対象エリアについては、なかなか表現が難しく、公共的な主体が所有しており、また都市計画制度とも大きく関わることをコアゾーンとして書かせてもらっている。だからといって、それ以外の地域を排除するわけではなく、様々な資源や取組を連携させ、つなぎながら進めていく必要がある。

○村井委員

作業部会の方々には、大変、頑張ってもらって多くのテーマを議論していただいた。将来像についても、確かに重なり合うイメージなのだろうが、できるだけ分かりやすい最小限のキャッチフレーズで表現しようとのことで原案になったものと理解している。

頑張ってもらって多くのテーマを盛り込んでいただいたが、岡崎地域で全てのことを実現したいというのは欲張り過ぎで、私は、逆に「引き算」が必要なのではないかと感じた。対象エリアの中には実に多くの資源が含まれているが、あれもこれもと色々なことをやればやるほど、ますます曖昧になってしまうと感じる。

また、黄色の線で表現されたコアゾーンについて、私は検討委員会の場で何度も「人を滞留させる要素がない」と申し上げてきた。先ほど「食」という話題もあったが、やはり人々がこの地域に滞留できる、場所・機能が必要なのだろうと改めて感じた。そういう視点では、これも申し上げてきたが、京都会館が再整備される際、レストランを二条通側に配置したり、中庭を憩いや交流の場としてもっと活用できる方法を考える必要がある。

いずれにせよ、岡崎という場所で京都の文化の全てを実現できる、というように考えすぎない方がよい。むしろ、岡崎を拠点に、さらに北や南へ行けば、京都の様々なことを見ることができる、岡崎はそうしたつなぎの場、センターになり得るのだ、そういう観点が必要である。

順序としては、まず原案のように、考えられるテーマ・事柄を全て挙げた上で、今後は引き算をする、メリハリをつけていくという作業が必要なだろう。

○南委員

私が提案したMICEも取り上げていただき御礼申し上げます。何点か気になった点を申し上げます。

まず「国際MICE拠点」という表現についてだが、MICE需要は、国内、海外、両面において発生する。わざわざ「国際」と限定する意味はない。

また、「文化・芸術の拠点」と「MICEの拠点」が抱き合わせで併記されている点にも違和感を抱いたが、文化施設である京都会館をMICEとしても活用していくのだという趣旨で抱き合わせ併記したのだと理解している。

この書き方について特に否定するつもりはなく、また京都会館をなくして代わりに大規模なMICE施設を造れとまで主張するつもりもない。ただし、これからの都市インフラとして必要なコンベンション機能が不足しているという弱点を京都が持っている中で、京都会館周辺の整備内容が岡崎地域のMICEの可能性、引いては京都全体のMICEの可能性にも関わるものであり、慎重に議論していただきたい。

また、細かい点だが、3ページ琵琶湖疏水の記述について。「世界遺産として登録」という話も出ているが、琵琶湖疏水については単に過去の「遺産」としてだけでなく、100年以上経った現在も、京都のまちを維持しているものである。その点が、ユネスコの他の世界遺産とは大きく異なっており、ビジョンの記述でも工夫いただきたい。

○中西委員

ビジョン自体は、非常によくまとまっているが、岡崎地域の知名度向上に関連して意見を申し上げます。このビジョンを発表してメディアがどの点に注目するだろうか、どのように取り上げてくれるだろうか、という点を気にした。キラリと光る、シンボリックなものがないのではないかと。

一例だが、山科区の琵琶湖疏水沿いに安朱という桜の名所があった。地域の方々が頑張っ

て菜の花を植え、新たに菜の花の名所としても知られるようになった。色々な旅行・観光雑誌に掲載されるようになり、全国からのお客さんが集まるようになった。このようにメディアの力は非常に大きい。

その点、第1回目の検討委員会から提案させていただいているが、社会・経済情勢的に復元は難しいとしても、地域シンボルとして八角九重の塔を何らかの形で盛り込めないだろうか。本日のビジョン案にも夜の賑わい創出として「ライトアップ事業」が盛り込まれているが、ライトアップ事業は、国内でも非常に多くの類似イベントがあり、よほど頑張らない限り、注目を集めるような取り組みにはならないだろう。

そこで提案だが、八角九重の塔を鉄骨で組み、それをイルミネーションで照らしてはどうか。鉄骨であればコスト的にも比較的安くすむだろうし、メディアも注目してくれるのではないか。

また、対象エリアマップについて、琵琶湖疏水分線である哲学の道や白川などを青色の線で表現してはどうか。蹴上浄水場、夷川発電所、蹴上発電所も記載するなど水に関する豊富な地域資源の表現を充実していただきたい。

○本多委員

作業部会の方々には、色々御議論を重ねビジョン案としてまとめていただき、御礼申し上げます。このビジョンにより、岡崎地域がますます多くの人を引き付ける魅力的な地域になると大変ありがたい。

将来像について「人々が集い、ほんものに出会う『世界の岡崎』」と記載いただいている。平安神宮も国指定の重要文化財となり、いよいよ建物も本物と認められるようになった。

また、明治28年に平安神宮が創建されたことを記念に始められた「時代祭」も、他府県では真似のできない催しを、という提案で創られたものであり、厳密な時代考証の下で、京都が持っている技術が全て盛り込んだ各時代の衣装を復元した行列、まさに「ほんもの」である。

こうした点を踏まえると、岡崎地域活性化のために、平安神宮として何ができるだろうかと考えた時、建物や、京都の伝統工芸の集大成である時代祭を含め、京都の文化を将来に渡り発信していけたら良いのではないかと考えている。

○濱崎委員

中西委員から御提案あった八角九重の塔については、私も関心を持っていた事項である。

ライトアップの光で八角九重の塔を仮想的に表現するのは非常におもしろいアイデアである。オープンスペースがあれば可能なので、こうした実験的な試みというのは非常におもしろい。過去にこれほど大きなものが岡崎にあったのだと、体感できる。

○西村委員

貴重な御意見をたくさんいただき御礼申し上げます。

行政の計画には様々な種類がある。計画に書かれていることを5年、10年以内に必ず取り組む、という趣旨の計画がある一方で、岡崎の将来ビジョンのように、策定をスタートとして、行政や様々な主体で動かしていこうという趣旨のビジョンもある。

書かれていること全てを必ずしも実現できないかも知れないが、将来に向けて、エリアマネジメント組織という新しい仕組みの中で、多くの主体に参画いただきながら、岡崎を少しずつでもより良い地域にしていく。そのスタートとなるビジョンで、その後も進化するビジョンであると考えている。

1月のパブリックコメントなど、委員、市民の方々から多くの御意見をいただき、より良いビジョンとしてブラッシュアップさせたい。

先ほど、文化・芸術について議論があった。確かに岡崎地域にとって文化・芸術は重要なテーマであり、具体的な内容については、今後の取り組みの中で十分検討する必要がある。ビジョンの段階でも盛り込んでおくべき内容があれば、是非、御提案いただきたい。

また、岡崎グラウンドについては、以前の委員会でも色々御提案が出た。様々な可能性を残した広場とすることや、伝統文化を発信する施設、学びの機能、カフェやレストランなどの食の機能など。少々総花的ではあるが、様々なご提案があったという趣旨を取り入れ、原案の表現となっている。

○澤邊委員

「総合特区制度の活用」について、お尋ねしたい。もし総合特区制度として採用されたら、どのような展開になるのかとお教えいただきたい。

それから、もう1点、岡崎グラウンドに関連して意見申し上げたい。地域住民としても広域避難場所である場所が、フェンスに囲まれた野球場になっているということが問題になっている。従来から多目的利用のできる全天候型運動公園にしたいという希望を持っている。

様々な催しを岡崎グラウンドで行う場合、いつも心配になるのが天気である。琵琶湖の水に感謝する祭りである江州音頭の盆踊りに毎年協賛してきたが、天候（夕立）が気になるため、一昨年ぐらいから会場をみやこめっせに移した。せっかくの盆踊りを室内でやっても何の意味もない、本当に悲しいと個人的に思っている。様々な催しを開催する上で、こうした天候への対応も可能なよう工夫していただきたい。

○奥部長

総合特区制度については、9月に国へ提案をしたところである。現時点では、総合特区制度自体の法案がまだ成立しておらず、全国の自治体、民間・NPOなどにどのような提案があるか、政府として提案募集が行われたという状況である。

岡崎地域については、本当に素晴らしい地域であり、今ある貴重な地域資源・財産を将来へしっかりと保存・継承、また活用がされるよう、様々な取組・事業に対する国の規制緩和や税制・財政面の支援について、市全域を対象とした国際観光都市・京都総合特区の一つとして提案したものである。

提案段階であり、今後、総合特区制度の法案や制度の内容を見ながら対応していくこととなる。

○門内委員長

一般的に国は新たな施策をつくる際には、施策の対象となる地方自治体等に施策の原案を提案させる。その内容を見ながら施策をつくっていくことになる。

○中西委員

先ほど、琵琶湖疏水の世界遺産登録の話が出た。正直なところ、世界遺産登録にはかなりハードルが高い状況である。また、将来像の8ページにあるイメージパースのように、もっと多くの方が疏水に親しめるような新たな空間整備を行うことは、世界遺産登録を目指すことと多少方向性が異なっている。個人的には多くの方が疏水に親しめる空間が増えた方が良く感じているが、琵琶湖疏水について考え方の整理が必要である。

岡崎地域に存在する公共施設の多くは「京都〇〇〇〇（施設名）」「京都市〇〇〇〇」の

ように「京都」で始まっており、「岡崎」の地名が入っていない。この中の代表的な施設の1つか2つを選んで「岡崎〇〇〇〇」とか「京都岡崎〇〇〇〇」と名称変更すれば、岡崎の知名度向上にもつながるのではないかと思う。

○山口委員

ビジョン案をより良くするためにいくつか提案したい。

まず、9ページ目の方策について。実現のための7つの方策として、①から⑦が掲載されている。恐らく優先順位が高い順になっているのだろう。「①エリアブランドを構築し、世界に向けて情報発信」と書かれているが、内容を見ると単にポータルサイトを作ろう、などテクニカルな話で、それほど優先順位が高いように見えない。現在の内容であれば「⑦集客・国際ツーリズム拠点としての機能強化」と合体させても良いのではないか。優先順位について、再考の余地があるのではないか。

また、「⑥環境に優しい岡崎の創造・発信」という言葉があるが、これは、6ページ目の課題のところ使われている「環境モデル都市を牽引する進取の取組が必要」という言葉に変えた方が良い。こちらの方が、環境モデル都市としてのスタンスを表すにふさわしい、より積極的な言葉である。

○門内委員長

実現方策の①については、具体的な取組例としては、現段階ではポータルサイト設置などにとどまっている。恐らく、今後は、都市ブランディングや都市プロモーションなどの概念が必要になってくる中、鍵になる方策である。他の方策にも全体的に関わってくるので一番上に掲載している。一方、実現方策全体については、特に優先順位があるわけではなく、それぞれの方策が相互に関係しあいながら、進められていくことになる。

○南委員

先ほど申し忘れたので1点申し上げたい。12ページの下のMICEに関する記述で「ワンストップ窓口」という記述がある。確かに各施設を総合的にオペレーションする機能は必要だが「ワンストップ窓口」という書き方が軽易過ぎるという印象がある。

○門内委員長

確かに京都はコンベンション施設が非常に少ない。作業部会でもみやこめっせや京都会館などが連携して利用できると良いなどの議論があった。

また、山口委員からも話題があったが、今、世界中の都市で「創造都市」あるいは「クリエイティブシティ」という考え方が流行っている。国内では横浜、金沢、国外では、イタリアのボローニャなどが注目を集めており、ユネスコも世界の創造都市の連携を目指すクリエイティブシティネットワークを提唱しているところである。では、クリエイティブシティとは何かというと、都市に住んでいる人たちが自身がクリエイティブで、そこで、様々な新しい創造が行われるような都市のことである。その際、一番大事なのは文化、芸術とか、人的資源だと言われている。岡崎地域は、そうした素地をきっちりと持った地域である。

先ほど、文化・芸術については、小林委員から「もう少し具体的な内容にしては」との御意見もあったが、もっとこうした内容を盛り込んでという御提案があればいただきたい。

また、他のテーマでも御意見があればいただきたい。

○太田委員

駐車場が不足しているのです、将来的に、この地域は自動車でも来てもらう地域なのか、公共交通機関でも来てもらう地域なのか検討する必要があります。一方、上村委員の御意見でもあったように、観光シーズンにはバス路線の混雑も解消しなくてはならない。そうした中、この地域を周遊するお洒落なトロリーバスのような交通機関を導入できないか。

○門内委員長

地域内交通については、13ページ目の中に「地域へのアクセスと地域モビリティの向上」という中に盛り込ませていただいている。

○高木副委員長

エリアマネジメントのことについてお話ししたい。今回のビジョンで一番特徴的なことが、このエリアマネジメントである。このビジョンで描かれた将来像を目指し、可能なところから実行し、マネジメント＝運営していく組織である。この組織は固定したメンバーによって運営されるのではなく、例えば再整備された京都会館で新しい試みのステージを行いたいというプロジェクトが起こった際、そのプロジェクトをこのエリアマネジメント組織に持ち込み、実現するために様々な調整を行う。今まで、岡崎地域を良くしたいと皆が抱いていた様々な夢や取組を実現する組織である。先ほど西村委員からも進化するビジョンという御発言があったが、委員の皆さま含めより多くの人に協力・参画いただき、岡崎を舞台に新しいことにチャレンジする試み、ビジョンでありたい。

○門内委員長

副委員長から補足いただいたが、都市計画の分野も大きく変わってきており、開発業者が来て開発するというディベロップメント型ではなくて、まちを育てていくという考え方に変わってきている。エリアマネジメント組織というのは、まち育ての主体である。

例えばファーストステージでは、施設間利用を促進するコンシェルジュをやりたいという人たちがプロジェクトに関わり、積極的に動いていただいた人の中からエリアマネジメント組織に加わっていただく。セカンドステージで、施設の更新・建設を含むまた別の新しいプロジェクトに取り組んだら、またそのプロジェクトで活躍する人々にエリアマネジメント組織にメンバーとして加わっていただく。そうしてエリアマネジメント組織自身も進化していく。いろいろな人を巻き込んでいく（インボルブメント）ことが重要である。

こうした仕組みを行政が支援しながら、まちをつくる力には、市民、そして当然、企業等の力も必要である。こうした新しいまちのつくり方を実践していくために、エリアマネジメントの組織を作ることをビジョンでも提案している。

また、もう1点、作業部会でも議論していたのがロードマップについてである。今すぐ取り組むことと、時間を掛けて将来的に取り組むことをふるいに掛け、時間軸で整理していくことも必要である。原案では、当面の10年程度の中でやること書いてあるけれど、50年、100年後に至るまでのロードマップも意識する必要がある。また、将来は決めたとおりに動くとは限らないので、ロードマップ自身も変化しながら考えていかななくてはならない。

そうした、長期的な視点を意識しながら、環境、景観、歴史の問題なども意識して、様々な方策を進めていくという取組になるだろう。

○西村委員

この検討委員会と並行して、京都市のプロジェクトチームの中でも色々と議論を進めてい

る。プロジェクトチームの議論においても、将来の岡崎を語る上で、制約条件を気にして、やれることだけを議論するのではなく、幅広い検討をしていきたい。

是非、委員の皆さんの意見とあわせ、取組を進めて参りたい。貴重な御意見をたくさんいただき、御礼申し上げます。

○門内委員長

本日は委員の皆さまから貴重な御意見をたくさんいただいた。パブリックコメントの前に、もう一度検討委員会を開くということは日程的に難しいので、意見の反映については、委員長に一任いただくということによろしいだろうか。

——（一同 了承）——

○門内委員長

それでは、そのようにさせていただく。

なお、先ほど事務局からも説明があったように、パブリックコメントを経て最終案が策定されるので、まだ委員の皆さまから御意見をお出しいただく機会はある。先ほど、私に一任いただいたのは、あくまでパブリックコメントに出す案への修正についてだけである。

パブリックコメントを反映した最終案は、3月の第4回検討委員会で協議させていただく。日程は、改めて事務局から調整させていただく。

それでは予定の時間となったので、本日はこれで閉会させていただく。長時間に渡り、貴重な御意見をいただき御礼申し上げます。

4 閉会